HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	継承語教育におけるCLILアプローチの可能性 ： 日本在住ロシア語話者の場合［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	Savinykh, Anna
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16040号
Issue Date	2024-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92795
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	SAVINYKH_Anna_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：サヴィヌィフ・アンナ

学位論文題名

継承語教育におけるCLILアプローチの可能性

―日本在住ロシア語話者の場合―

日本在住のロシア語話者は2022年12月現在1万人を超え、この37年間で33倍に増えた。ロシア国籍だけではないロシア語話者の子どもの人数は正確には分からないが、想定で1,000人を超えている。このような子どもは継承語話者と呼ばれ、彼らはロシア語を主に家庭で使っているが、学習言語は日本語か、インタナショナルスクールに通う場合英語である。継承語ロシア語話者に有効なロシア語教育を提供するため、CLIL（Content and Language Integrated Learning、内容言語統合型学習）の継承語教育への導入の可能性を検討した。CLILは言語と科目内容を同時に学習することを目的とした、1990年代にヨーロッパから広まった教授法である。

CLILは様々な科目や言語を教える教育的アプローチとして扱われ、104の国や地域で使われているか、または使われようとしていることが分かった。CLILの多様性の原因は柔軟性であると著者は考える。教授法として有効であると思われているCLILの継承語ロシア語教育への導入は本論文で検討した。本論文の研究目的はコンテクストやアクターを検討し、継承語ロシア語教育へのCLILアプローチの教育移転の種類や現段階を特定し、継承語教育におけるCLILアプローチの可能性を明らかにすることである。そのため、7つの調査を行い、その調査結果や考察を本論文で述べた。

本論文の理論枠組みである教育移転論では、教育のアイディア、構造、実践が一つの時期・場所から違う時期・場所へ移動することを示している。CLIL の継承語ロシア語教育への移転の可能性を明らかにするため、コンテクストである家庭や教育現場のロシア学校、及びアクターである学習者（子ども）、継承語ロシア語話者の親、ロシア学校の教師をそれぞれ対象として調査した。学習者の現状や目的に基づく教育的ニーズを調べた結果、能動的語彙や受動的語彙の差を活かし、オーセンティックのインプットを増やし、欠如している学習言語のロシア語や認知能力に焦点を当て、文法を認識させるフォーカス・オン・フォームで教えることが有効であると予想した。なお、帰国の予定がある家庭が少なく、また周りのロシア語の環境が限られた中、子どものモチベーションを保つことは大きな課題であることが分かった。

親のモチベーション、子どもが将来ロシア語を使うレベルの水準やロシア学校への期待をそれぞれ「統合型」、「道具型」、「言語関連」の３項目で分析した。その結果、親のモチベーションは家族などとのつながりやロシアの文化の知識を表す「統合型」が一番高かったのに対し、子どもの将来においてはロシア語を「道具」として使用を望んでいることが多かった。ロシア学校への期待は「ロシア語の読み書きを覚えさせる」などの「言語関連」が多かったが、「道具型」と「統合型」も重要だったことが分かった。なお、子どもの言語能力に関する親の「期待」と親が評価する「実際のレベル」の違いや、そこから浮かぶ罪悪感と関連していると予想している。その中、多く

の親は日本語もロシア語も習得してほしいという「２文化型」言語行動方略を選び、両親の言語によって「一親一言語」か「一場所一言語」や「一場面一言語」という家庭言語政策の割合が多いことが分かった。また、家庭言語政策の変化に、親が抱える外的理由（言語環境の変化、仕事の量)、内的理由（周囲の反応、第 2 子出産による信念の変化）と子どもの反応が影響を与えることが分かった。

継承語話者はロシア語を家庭以外で使う機会が少ないため、モチベーションを保つのが難しいことが分かった。継承語ロシア語教師に対する調査によると、この場合、興味がある科目を通して学習することが有効であるという CLIL に関する展望があることが分かった。なお、CLIL は認知・メタ認知能力を伸ばすことも期待された。教師の懸念は、CLIL に関する資料や CLIL 教材の少なさ、教師への負担などに関連した。

ロシア語学校やサークルは、増えつつある生徒の人数に合わせて、親が求める、または教師が教えられる科目を少ない授業回数で教えなければならないことが明らかになった。また、教師は一つだけの科目を教えることは少なく、「何でも屋」のようにいくつかの科目を教えなければならない。その中でも、ロシア語学校・サークルに通う学習者の人数を保つため、彼らの興味を引くような内容の授業を行う必要がある。また、親の要望に合わせて、親が求める教育内容も提供しなければならない。教師の専門能力は、教育学や言語教育が多く、また教師が教えている科目の専門的な教育であることがほとんどであることが分かった。教授法では事実上の CLIL か CLIL の要素の一部（言語と科目内容の統合）であることが分かり、さらに CLIL を授業で使っている学校もあることが明らかになった。ただし、教材ではまだモノリンガル用の教材を使う教師が多く、それを継承語学習者の教育的ニーズに適応させる際、教師の大きな負担になっていると考察した。

ロシア語、日本語、英語の各言語の理科の教材の課題を分析し、その分析結果を継承語ロシア語教師が考える「良い教材」と比較した。それに基づいて CLIL 教材を作成し、CLIL の学習効果を確認するため教育実践を行った。その結果、CLIL は言語、科目内容、認知の分野で学習効果を見せたが、non-CLIL グループとの有意差があったのは概念理論思考の発達のみだった。ただし、概念理論思考は学習において重要な役割を果たすため、CLIL は今後の学習の成果につながると想定した。